

## 大慶地区の猛禽

薛建華<sup>1</sup>・郭五民<sup>1</sup>・劉曉劉<sup>2</sup>  
 大慶経済学校<sup>1</sup>・哈尔滨師範大学<sup>2</sup>  
 訳 福井和二

猛禽類は全て国家Ⅰ、Ⅱ級保護動物に指定されている。その数は少なく、観察することが難しい種が多い。大慶においては過去に専門的な猛禽の研究は少なかった。われわれは1988年～1998年の間、大慶地区の野生動物の調査およびその他の専門的課題に関する研究の一環として大慶市の猛禽の調査を行なったので、その結果を整理して以下に報告する。

## 研究地区と方法

大慶は松嫩平原<sup>ソングン</sup>の中央部に位置し、大面積のヨシに覆われた湿地沼沢と草原が主要な自然環境である。1960年代より大規模な石油開発が進められ、その後、多くの島状の人工林、耕地、村落など人工的環境が造成され、むしろ、環境は多様化した。この地域の地勢は平坦で、面積約5500km<sup>2</sup>で、湖沼が非常に多い。年平均気温3.2℃、春秋両季は強い季節風が吹く。

調査は紅旗林場、喇麻甸、杏樹崗、興隆泉と黒魚泡等を包含する多様な自然環境地域である。

10年来のわれわれの純野外作業日数は300日で、遭遇頻度を3段階に区分し、1～10羽を+、11～100羽を++、100羽以上を+++とした。

## 猛禽の種類

10年間の調査により大慶市で観察されたのは3科、21種で、黒龍江省全体で観察される猛禽44種の51.2%を占める。これらの種類中シロハヤブサとシロフクロウは大慶市では初めて観察され、シロハヤブサは黒龍江省において捕獲された初めての標本となった。これらの体位測定結果は表2に示す。

1990年12月と1992年1月には、シロハヤブサの白色型個体を観察している。

大慶市における猛禽の種類は比較的に多く、その原因は、石油開発により、この地域の環境が複雑、多様となり、島状に造成された人工林が、オオタカ、ミナミツミ、アカアシチョウゲンボウ、チョウゲンボウ、コノハズク、フクロウ、などの猛禽に採食場所して生息環境を提供することとなった。油田に張り巡らされた鉄条網も、ノスリ類、アカアシチョウゲンボウ、チョウゲンボウ、コミミズクなど草原で活動する猛禽が絶好の止まり場所として利用し、冬のケアシノスリが電柱の奪い合いをする光景をみかける。彼らの多くは電柱や鉄条網の杭の上、人工林などで、それぞれの個体が冬季の捕食領域を均等に領有している。近くの扎龍自然保護区の猛禽と比較すると、大慶市ではシロハヤブサとフクロウの2種が多く、これらは全て冬季に観察される。

## 猛禽の個体数

大慶市の猛禽はハイイロチュウヒ、アカアシチョウゲンボウ、ケアシノスリ、およびトラフズクが優占種である。前2者は留鳥あるいは夏鳥、後2者は冬鳥で、アカアシチョウゲンボウが最も多く見られる。調査では、カササギの巢の20～23%をアカアシチョウゲンボウが占拠していた。しかし、カササギは大慶市の鳥類中最大の優占種である。様々な生息環境の中に、カササギは、もし適当な営巣場所さえあれば何処でも分布を広げることが出来る。

秋、幼鳥が巣立った後、アカアシチョウゲンボウの個体数がにわかに増え、成鳥と幼鳥が草原の上を群れをつくって行動する。毎年秋になると100羽ほどの大群を必ず見かけるが、しかし、

それはカササギやその他の鳥類の群れとは異なり、一様に間隔をとり、大面積の草原の中にまばらな群をつくる。繁殖期には草原の中の人工林で繁殖し、その密度は0.4対/hm<sup>2</sup>であるが、秋季には同一環境で3~5羽/hm<sup>2</sup>に増える。

繁殖期のハイイロチュウヒは主に草原、あるいは湿地性の草原に分布し、しかも非常にまばらに分布している。冬期のハイイロチュウヒは比較的人家近くで行動している。

ケアシノスリハは冬期によく観察され、大慶地区で見られる猛禽中の優占種で、平均10km<sup>2</sup>に1羽を見ることが出来る。

トラフズクも冬期観察される種類で、彼らの群れは人工林の中で見られる。よく百以上のを見ることがあり、樹齢の高い密集したヤナギの林に、多くは樹冠のやや下がったところに止まっており、時には1本の樹に数羽が止まっているところを見かけることがある。

大慶地区でよく見かける猛禽には上記の外、ハイタカ、マダラチュウヒ、チゴハヤブサ、チョウゲンボウ、コミミズクの5種と、ほかに時折見かける12種がある。

### 生息状況

大慶地区の猛禽中、留鳥はハイイロチュウヒ、マダラチュウヒ、白腹鷗 *Circus spilonotus*\*<sup>2</sup>、チョウゲンボウ、アカアシチュウゲンボウである。このうちアカアシチュウゲンボウは、これまですべての記載に夏鳥とされているが、われわれの観察によると一部の個体がこの地方に留まっているので、とりあえず留鳥とした。チョウゲンボウも文献上では夏鳥と記載されているが、冬

期に表1 大慶市猛禽類リスト

種 類	分布環境	生息期間		個体数 クラス	観察状況					
		草林畑住	夏留旅冬		①	②	③	④	⑤	⑥
トビ	<i>Milvus korschun</i>	* *	*	+						*
オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	* *	*	+				*	*	*
ハイタカ	<i>A. nisus</i>	* * *	*	++				*	*	
ミナミツミ	<i>A. virgatus</i>	*	*	+				*	*	
オオノスリ	<i>Buteo hemilasius</i>	*	*	+				*		
ノスリ	<i>B. buteo</i>	*	*	+				*	*	
ケアシノスリ	<i>B. lagopus</i>	* * *	*	+++				*	*	*
ハイイロチュウヒ	<i>Circus cyaneus</i>	* * *	*	+++				*	*	*
マダラチュウヒ	<i>C. mejanoleucos</i>	* *	*	++				*	*	
白腹鷗* <sup>2</sup>	<i>C. spilonotus</i>	*	*	+				*	*	
シロハヤブサ	<i>Falco rusticolus</i>	* *	*	+				*	*	
チゴハヤブサ	<i>F. subbuteo</i>	* * *	*	++				*		
コチョウゲンボウ	<i>F. columbarius</i>	*	*	+				*		
アカアシチュウゲンボウ	<i>F. vaspertinus</i>	* * * *	*	+++				*	*	*
チョウゲンボウ	<i>F. tinnuculus</i>	* * * *	*	++				*	*	*
コノハズク	<i>Otus scops</i>	*	*	+				*	*	
ワシミズク	<i>Bubobubo</i>	*	*	+				*		
シロフクロウ	<i>Nyctea scandiaca</i>	*	*	+				*		
フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	*	*	+				*		
トラフズク	<i>Asio otus</i>	* * *	*	+++				*	*	*
コミミズク	<i>A. flammeus</i>	* *	*	++				*	*	

たびたび見ることができ、その数が減少していることはないので、われわれは留鳥と考えている。また3種のチュウヒ類も同様に考えている。

シロフクロウは冬鳥であるが、大鷹で見かける数は少ない。われわれは1997年12月、1羽の標本を得ることができた。

### 繁殖状況

調査中、ただアカアシチュウゲンボウとチュウゲンボウだけの巣と雛が確認されただけである。その他の種は、観察期間中数多く見られているので、夏鳥あるいは留鳥と確定した。

アカアシチュウゲンボウ；5月の末から繁殖期となり、明かにテリトリーを確保する行動が見られるようになる。新しいカササギの巣、あるいは古巣を占拠し、未だ利用されていない、完成間近な新しい巣を占拠する。彼らが、自ら新しい巣を作るのを見たことがない。6月上中旬に3～5、通常4個の卵を産む。卵は円形に近い卵円形、薄い焦げ茶色のかかった白色で褐色の斑点があり、卵色の違いは少ない。6月の末から7月の初めに孵化し、白色の産毛に覆われている。雛の発育は速く、7月の末には巣立ちをする雛を見ることができる。巣立ちした幼鳥は明かに家族群として行動し、親鳥が捕食の仕方を教えている。秋にはそれらがまばらな群れとなっており、時には家族群の名残りを見るものもある。

チュウゲンボウ；3月末から4月初め頃、カササギの巣を占拠して補修しながら、必ず1羽が巣の近くで見張りをしている。4月初め交尾をし、4月中、下旬に産卵する。卵は汚れたような白色に褐色の斑点があり、形は鈍端な卵形、1巣4～6卵。6月初め孵化、6月末にほとんどの雛が巣立ちする。巣立ち時期になると親鳥は今までのように給餌をしようとせず、少し離れた距離から餌で雛を誘い出すようにする。最初の雛が餌に誘われ巣を飛び出すと、つぎつぎと雛が巣立ちして、家族群行動期に入る。最初の数日は夜になると幼鳥は巣に帰る。樹に上って幼鳥を観察したときも親鳥は巣の近くを離れようとしなかった。幼鳥を捕獲、計測したときは親鳥は上空を旋回して追いかけてきた。

### 採食状況

アカアシチュウゲンボウ；繁殖期の主な食物はイナゴ、バッタ類で、トカゲ類、ネズミ類なども捕食する。1998年6月27日アカアシチュウゲンボウの巣内で6匹の麻蜥 *Eremias argus* (内4匹は原形のまま) とネズミ1匹を見た。巣内には5日齢の雛3羽が確認された。10月になってイナゴ類がいなくなると、アカアシチュウゲンボウも急速に数が減ってくる。

チュウゲンボウ；繁殖期にはイナゴ類を食し、9月上旬1羽のチュウゲンボウの胃内容物を見たところ、ほとんどがイナゴ類、鞘翅目昆虫で、ただ1匹のネズミの消化体が現われた。冬期のチュウゲンボウの餌はネズミ類と小鳥類である。

ケアシノスリ；林縁、草原、耕地等最も好む場所の上空を旋回し、地面のネズミ類を捕食している。捕獲した1羽の標本胃内容はネズミ4匹であった。

ハイタカ；渡りの時期はもっぱら小鳥を捕食し、秋期には人家近くの穀物倉庫、飼料倉庫に集まるスズメを捕食している。

ハイイロチュウヒ；繁殖期にはネズミ類を捕食し、冬期は人家付近のスズメを捕食している。1994年1月18日スズメを追って、誤って温室へ飛び込んだ雛の個体を見た。

### 種間関係

チュウゲンボウとアカアシチュウゲンボウ；両者ともカササギの巣を占拠して営巣するが、定期的に差がありアカアシチュウゲンボウの方が20日ほど早く繁殖にはいる。しかし、野外において、この両種が巣の争奪で争うのを見たことがない。彼らから巣を奪われるカササギの多くは、

すぐ近くに新しい巣をつくり始める。かつて、カササギが電柱に営巣していたものをチョウゲンボウに占拠された。そのカササギはすぐに新しい巣を作り、この2者が同じ場所で抱卵を始めた。チョウゲンボウは比較すると強引に新しい巣を占拠することが多く、アカアシチョウゲンボウは比較的古巣を利用することが多い。

チョウゲンボウとケアシノスリ；この2種は体形的に大小の差があり、また食性上も差があるのだが、冬期にはチョウゲンボウの領域に侵入したケアシノスリが攻撃を受け追い出されるのを見た。1990年1月10日、1羽のケアシノスリがチョウゲンボウの領域を通過しようとしたとき、電柱に止まっていたチョウゲンボウが何回もケアシノスリを攻撃した。はじめケアシノスリは意に介していない様子であったが、数回の攻撃でゆっくりと去っていった。チョウゲンボウがケアシノスリをしつこく攻撃するのは、冬期は2者の対象食物が重なるためと考えられる。

ケアシノスリ、トラフズクとカラス、カササギ；ケアシノスリとトラフズクも大慶地区で通常見ることができる越冬猛禽類で、この2種は、大慶地区の絶対優勢種であるハシボソガラスやカササギから常に集団で追い立てられている。1997年3月26日午前、カササギとカラスの群れが、トラフズクを攻撃し、彼が林の中へ逃げ込むまで攻撃を止めなかった。

冬期、ケアシノスリのいるところ必ずカラス、カササギの小群を見かける。彼らはケアシノスリの飛ぶ、その上に、下にと追尾する。このカラスやカササギの追尾はケアシノスリの捕食した餌の食べ残しを、あるいは、彼の発見して餌の横取りを狙っているのではないだろうか。

表2 体位測定値 g, mm

種類	性別	体重	体長	嘴峰	翼長	尾長	ふ脛	趾長	嘴裂	爪長
シロハヤブサ	—	—	600	28	410	265	75	55	40	23
シロフクロウ	♂	1750	530	33	400	240	45	43	45	20

訳注

\*1 松嫩平原；松花江と嫩江流域の広大な湿地性および乾燥した砂質の草原。

\*2 白腹鷗；山階鳥類研究所版“世界の鳥の和名”に採録されていないので、和名不明